

# 自由南アフリカの声

## *Voice of Free South Africa*

2018年3月

No. 71

～1冊の本が人生を変える～

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

Together with Africa and Asia Association (TAAA)



### 2018年3月の報告

- 7月～2月 南アにて図書・学校菜園・サッカー支援活動など。図書研修会、有機農業研修会、農業塾。国内にて、英語の本などを収集、分類・再梱包作業
- 8月 日本から南ア TAAA 活動現地を訪問
- 10月 英語の本（12115冊）や算数セットなどを南アに発送
- 12月～1月 TAAA 南ア代表一時帰国・報告会

### 目次

- ・畑作りと読書活動から広がったこと（平林薫） . . . . . 2
- ・地域の40校におこなったアンケート調査（久我祐子） . . . . . 6
- ・本の種類分けに参加して（加賀知子） . . . . . 7
- ・中村哲医師講演会の報告（上林潤子） . . . . . 8
- ・モンドリ・チリザさんからのおたより . . . . . 10
- ・活動日誌 . . . . . 11
- ・寄付金や本などを下さった方々 . . . . . 12



学校に届いた本の箱を開けて早速読み始めたウムシンシニ小の生徒たち

## ～南アの活動報告～

# 畑作りと読書活動から広がったこと

平林 薫

### 安全でおいしい有機野菜の収穫

JICA 草の根技術協力事業の有機農 (MOATS-Mthwalume Organic Agricultural Training School) では、2017 年 8 月～9 月に第 5 回有機農業トレーニングコースを開催、13 名が修了した。これまでの 5 回のトレーニングコース全体で 77 名が卒業、卒業生の割合は女性 51 名、男性 26 名と、圧倒的に女性が多い。トレーニングコース終了後に職を得て町に出たり、学校に通い始めたりした卒業生もいるが、畑作りを続けている卒業生の多くは収穫物を主に家庭で利用している。栄養価が高く、安全でおいしい有機野菜をとれるようになったこと、野菜の購入額が減らせること、余剰分があれば近所の人に販売して多少の収入を得られることなど、毎日の生活にプラスの効果が出てきている。また、小人数ではあるが地域で有機農業に従事したいと畑作りを行う卒業生 (主に男性) も見られるようになった。今年は農業塾を拠点として、このような“農家を目指す”若者たちと共に学びながら実地経験を積み、事業終了後、そして将来、地域に有機農業が確実に定着することを目指し、種や苗の入手方法の確立やマーケティングにも力を入れたいと考えている。

### 養鶏の取り組み

10 月～11 月には、農業塾トレーニングコースの上級コースとして指導員のシャリが講師となり、養鶏研修会 (3 日間) を 2 回開催した。農業塾の有機農業トレーニングコースの卒業生全員に連絡を取り、興味と時間のある 19 名が参加した。養鶏には自然 (半自然) 養鶏とブロイラー飼育があり、有機農業を進めている農業塾では半自然養鶏を取り入れることとし、エナレニ農場のリチャード・ヘイグ氏に監修いただくことになった。研修会の準備として、まず指導員がエナレニ農場でヘイグ氏から半自然養鶏方法の指導を受け、研修会用マニュアルを作成した。そして農業塾敷地内に指導員が手作りで半自然養鶏用とブロイラー飼育用の 2 つの鶏舎を建設した。

農業塾の養鶏プログラムで利用している鶏クワック



州農業省主催の収穫祭。農業塾は苗を出展した。

鶏はヘイグ氏の何種類かの候補のうち、南ア国内で品種改良され、肉・卵がおいしく、美しい羽根も利用でき、丈夫で大人しい (万能!) クワック (Koekoek) が選ばれた。食肉用ブロイラー鶏は、昨年初めの鳥インフルエンザの影響が長引いたためヒナが購入できなかったこともあり、飼育方法の指導のみとした。ブロイラー鶏の飼育には栄養剤やワクチン購入等のコストがかかり、鶏舎内のみでの飼育のため手間もかかる。一般的には大規模養鶏向きだ。自然 (半自然) 養鶏では鶏糞が作物栽培に利用でき、安全でおいしい肉や卵が食べられる等の利点があることを学んだ。そして何より、鶏を飼うことで農業塾内も明るくなったようだ。卒業生の活動の中にも無理のない形で養鶏が取り入れられ、現金収入につながればと考えている。

### 卒業生グループが協同組合計画

会報 70 号でお伝えした通り、第 3 回コースの卒業生を中心に結成されたグループが協同組合設立に向けて活動を進めている。メンバーは昨年 7 月より共同菜園での畑作りを行っていたが、場所が遠いため足の便が悪く、綿密な管理が難しかったことから、昨年末か

らはそれぞれの家の敷地内での畑作りに切り替えた。



山間部トフェット地域の家庭菜園

まずは小規模でも有機農業の技術を磨き、マーケティング等の経験を積むことが大切だと考えたようである。メンバーは現在も定期的に会合を持っており、グループとしての将来の活動計画も話し合われている。共同菜園として使われた土地は事業対象地域内であることから、近隣の住民の希望者6名が引き継ぐことになり、近日中に畑でのメンバーへの有機農業研修が行われることになった。また、やはり前号でお伝えした山間部フォクソン地域のグループメンバーは、有機農法による家庭菜園で経験を積んだ後、メンバーの住居の近くで灌漑用水も確保できる場所にグループ菜園を設置して15名が畑作りを始めた。カウンターパートである州環境省の担当者は指導員のボングムーサと共にグループの活動をモニタリングし、メンバーが確実に活動を進めていることを確認した後、メンバーの共同利用のための農具一式を調達してくれた。また、州環境省主催の会議やイベントに指導員や農業塾卒業生、地域住民グループメンバーが招待され、他地域のメンバーとの交流や情報交換の機会となっている。

農業塾の卒業生で、現在は指導員として積極的に活動に取り組んでいるンコシナティは、やはりカウンターパートである州農業省の担当者と密に連絡を取り合い、州農業省主催の研修会やセミナーに参加して学んだことや情報を他の指導員や卒業生と共有している。そのような場への出席はネットワーク作りにもつながり、他地域のCWP(コミュニティ・ワーク・プログラム)メンバーや若者グループへの農業塾の広報や情報交換を行っており、有機農業研修のリクエストを受けて開催したり、苗の注文を受けて育苗をしたりと活動の幅が広がってきた。

山間部では地域住民2グループが新しく事業に参加した。トフェット地域のインドゥナ(地域リーダー)シंगा氏から紹介された隣の地域のインドゥナ・ヴェジ氏が中心となってメンバーを募り、地域住民17名が指導員から有機農業研修を受けて家庭菜園を開始した。この地域は伝

統的に主食であるメイズや豆、かぼちゃ等を栽培しているが、伝統農法から一歩進めて有機農法を取り入れ、葉物づくりにも力を入れて多種の野菜を収穫できるようになることを目指している。ボングムーサは地域のチーフとも面会し、活動についての説明と協力を要請しており、チーフからは他地域のインドゥナにも伝えると前向きな返答があった。

## “農業で独立したい”

もう1つのグループは、学校菜園活動の対象校であったインコロバネ高の卒業生グループと集まり、アドバイスが欲しいとボングムーサに連絡が入った。フェンスや農具があり、在校生にも教えられるということで、高校の敷地内で活動を行っている。彼らが学生の時に得た技術を使って畑作りをしようと立ち上がったことは大変頼もしく、学校教育の中に有機農業の技術指導を取り入れたことは効果があったと感じている。このような事例からも地域内での就職口が大変少ないことが明らかであり、今後“技術を持ち、独立して仕事をする”ことの必要性がより高まってくると思われる。有機農業技術はその一つの機会であり、私たちが生きて行く上で最も重要な“食”に関わる産業の従事者が増加することを期待している。

そのように“農業で独立したい”と考える若者たちにとって、次のステップは収穫物の販売・マーケティングである。農業塾では敷地内の収穫物を地域住民への販売や、有機野菜の生産・販売経験のあるンギディ氏



農業塾は農業のセンターの役割を果たすべく、育苗に力を入れている。

からも学んで、年金支給所やクリニックでの販売、ヒバディーンのスーパーマーケットへの卸しなどの実践を行っている。ただ、このような売り先は日にちや対象人数が限定された小口のため、生産者間で競争になってしまうリスクがあり、またヒバディーンまではかなり距離があるといった問題点もある。タイミング良く昨年末に対象地域により近い場所に(それでも移動手段は車になるが)大きなスーパーマーケットがオープンし、地域内で栽培された野菜を直接買い取ってくれることになった。例えばホウレン草は、ヒバディーンのスーパーより一束あたり50セント高く買い取ってくれる。他にも学校給食の食

材業者に卸すなど、様々なルートを模索して行きたい。

## 活動を継続していくための課題

10月～11月にかけて学校菜園活動のモニタリングを行い、現行事業の2地域の対象校はもちろん、先行事業の対象校も含めて39校を訪問した。モニタリングの結果からは、学校によって差はあるものの、何らかの形で菜園活動が継続して行われており、活動は生徒の技術習得や収穫物の利用など効果があるという認識があることが見てとれた。そして活動の継続にはやはり熱意を持った担当教師の存在とリーダーシップが不可欠であることを実感した。担当教師が離職したため活動が十分に進んでいないと話す学校には、改めて興味を持った教師を任命してもらい、活動を再開するよう働きかける。活動を継続して行く上での問題点としては、1. 灌漑用水の確保、2. 種や苗の入手、3. 害虫や動物等があがった。学校によっては“保護者から生徒の畑仕事へのクレームがあった”“活動の時間がない”等のコメントも出たが、そのような学校は校長の活動への理解と認識が不足している場合が多く、対応が難しい。2. の種や苗の入手に関しては、学校だけでなく地域全体の有機農業の普及と定着にとって一番の課題と言える。事業参加者にはできるだけ自家採種を行うよう奨励、指導しており、比較的種がとりやすいピーマン、トマト、カボチャ等はもちろん、農業塾ではニンジンやタマネギ、ハーブ等の花を咲かせて種を取る作業を実践し、マニュアル作りも進めている。また、現行事業終了時まで、農業塾がガーデニングセンターとして学校や地域住民に苗の供給ができるようにしたいと考えており、昨年末から育苗に力を入れている。すでに近隣の住民や他地域のグループなど、顧客もできており、特定の野菜の苗のリクエストも入ようになった。次期には育苗所の拡張も計画している。

## 農業塾の多様な機能

農業塾には講義室と図書室兼リソースセンターが設置されており、本の貸出しやコピー・インターネット等のサービスを行っている。地域住民がIDブックや履歴書のコピーに来たり、卒業生が本を借りに来て指導員と話したりする姿が見られる。また、近隣の生徒が図書室内で本を読んだり、試験前の高校生が友達と何人かで勉強したりする姿も見られるようになった。リクエストに応じて指導員が夜遅くまで対応したり、週末出勤をしてリソースセンターをオープンすることもある。将来的には農業塾が有機農業のみならず、様々な技術を学べる場所として機能するようになることを期待している。

## 図書活動の成果発表

外務省 NGO 連携無償資金協力による図書事業は早いもので2月末に終了となることから、現在、各対象校の図書室状況の再確認と蔵書の整理・補充作業、図書委員会活動継続に向けた新メンバー生徒の引き継ぎ状況の確認、司書教師へのアンケート等を行っている。また、ICT(情報コミュニケーション技術)対象校では、12月の学年末までに指導が修了できなかった生徒への補習等も行

っており、基礎知識と技術を習得した生徒には修了書を発行する。ICT 技能の習得は、生徒が進学や社会に出る際の自信につながり、技術は何らかの形で役立つことだろう。今年度の図書事業の最後の研修会および今後の活動の継続に向けた情報交換の場として、2月22日に地域のホールで図書イベントの開催を予定している。対象校30校から司書教師と生徒数名が出席し、読書推進や図書委員会活動についての発表を行う。



## 算数セットのすばらしさ

今年度の活動として新たに取り入れた、小学校低学年生徒対象の“算数セット”を利用したバイリンガル算数指導のプログラムは、モンドリの指導で順調に進んでおり、各対象校の教師から“効果的”と高い評価を得ている。おもちゃのような“算数セット”で楽しく遊びながら算数の基礎を学ぶ生徒の姿に、改めて“算数セット”の素晴らしさを実感している。現地の多くの学校では予算等の関係でこのような教材は導入されておらず、生徒は“教師の授業を聞き、教科書を読む”という抽象的な方法のみでの学習している。算数セットを使って授業を行うモンドリも教師も“生徒の算数理解力が確実に上がっている”と話す。事業終了後も教師が算数セットを利用した授業ができるよう、指導方法のアドバイスやパーツの補充を行い、モニタリング訪問も継続して行う。

## 南アのスタッフたち

2月末にN連事業が終了ということで、残念ながらICT指導員のントゴゾ、ジンシェ、アシスタントのムジは契約終了となる。短い時間であったが、学位を持つ優秀なスタッフと仕事できたことは大変喜ばしく、学校でも生徒たちのロールモデルとなったことと思う。モンドリには継続してTAAA図書事業およびJICA事業のアシスタントスタッフとして次年度も活動に携わってもらうことになった。3月からは図書事業対象校の活動継続に向けた訪問指導と共に、学校菜園委員会メンバー生徒へのサポートや農業塾リソースセンターでの活動等、マルチに活躍してもらうことになる。モンドリは今やTAAA南アフリカ事務所になくてはならない存在となった。プロジェクトマネージャーとモンドリは、教師が不在のため自習をしている低学年の教室などでやさしい英語の本の読み聞かせを行った。生徒一人一人に同じ本を配り、

単語と文章の意味をズルー語で伝えながら一緒に音読を行うことで、物語の意味を理解する力をつける。また、一つの物語を読み切ることで生徒の自信にもつながる。読書への興味と読解力の向上には、できるだけ早い時期から本を読む習慣を身につけ、本への抵抗感をなくさなければならない。これは算数への興味と能力向上、菜園活動に関しても、小学校低学年生徒への指導が最も重要であることを実感している。また、各対象校のどのレベルにおいても、生徒が十分な単語力をつけるために辞書(英-英および英-ズルー)が必要であり、本来は生徒各自が所有していることが望ましい。

## 読書は読み書き能力の第1歩

学生の読み書き能力に関する国際的な調査(Progress in International Reading Literacy Study)によると、南アの小学校4年生の10人に8人が“適切な理解力を持って本を読むことができない”レベルで、50カ国中最下位という大変残念な結果であった。この報告を聞いたとき、生徒の英語力不足など言語の問題かもしれないと思ったのだが、各国・各地域で生徒の母語によるテストが行われたという。南アフリカでは4年生は母語から英語に移行する時期で、言語の混乱が見られること、また低学年時の教材不足等の理由から、母語・英語の習得が共に不十分であることが理由として考えられる。南アフリカには世界のトップレベルと同等の学校もあり、そのような“エリート校”10校では



いつも利用者が絶えないベカマンデル高の図書室

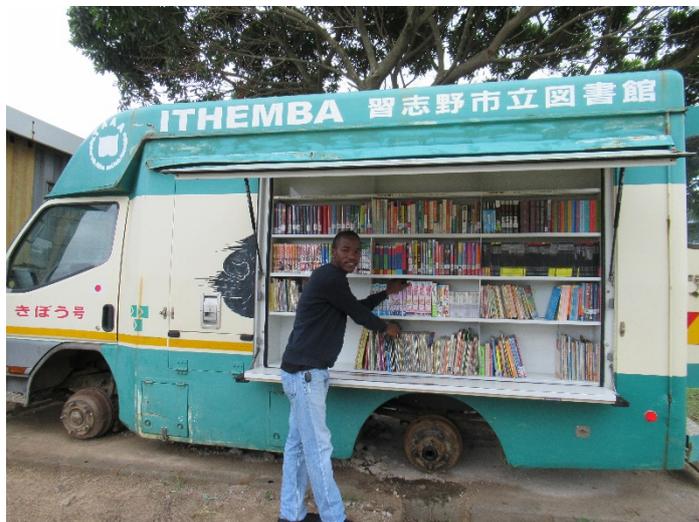
65%の生徒が十分な識字力をつけているのに対し、遠隔地域の“貧しい”学校では10人に1人もそのレベルに達していないという。いわゆる教育格差である。ある対象校の校長は、“我々の生徒たちは能力がないわけではない。機会が不足しているのだ”と話す。対象校に小さいながらも図書室が設置されたことは、生徒に読書の機会を与えるための第一歩と言える。次のステップは生徒が本に親しみ、本を読んで内容を十分に理解することである。事業ではICT指導やキャリアガイダンス等、生徒が将来社会に出る際に重要な知識と技術の習得に向けた取り組みを行ってきたが、今年は改めて、生徒の読書推進と“読解力”の向上を目指した活動に力を入れている。

## サッカーボールも大歓迎

昨年10月に日本を出発したコンテナ船は、大雨によるダーバン港の閉鎖で到着が遅れが出たが、荷物は無事11月29日にTAAA事務所に届いた。今年度は活動対象地域内外のこれまでに訪問していなかった学校にも本を寄贈し、図書室設立のサポートをしたいと考えており、すでに数校の校長や教師からリクエストが届いている。今回はサッカーボールの数が例年より少なかったが、学校でのニーズが大きく、特に“三度のご飯より何よりサッカーが好き”な男子生徒の学校生活へのサポートにつながることから、収集にご協力、収集方法のご提案等をいただければうれしい。モンドリも近所の子供たち(対象校の生徒)からのリクエストで地域サッカークラブを設立し、コーチ・マネージャーとして活躍している。TAAAは昨年末ユニフォーム一式を寄贈し、チームはすでに他の地域サッカークラブとの試合も行っている。今後もTAAAの活動の3つの柱“図書・菜園・サッカー”をバランスよく、学校および地域の人たちと共に進めていきたい。

## 移動図書館車引退し図書室に

TAAA 図書事業として2008年よりイレンベ郡・ンドウエウエの学校、そして2010年よりウグ郡の学校を巡回訪問し、多くの生徒たちに愛された移動図書館車“きぼう号(ズルー名:イテンバ号)”が引退することになった。過酷な暑さや埃にまみれながら悪路の山道を長距離走り、山奥の学校の生徒にも読書の機会を与えるという、大変重要な役割を果たしてくれたバスに改めて感謝したい。“隠居”地は、現在の対象校を管轄する州教育省の学区オフィス(トゥートン)の敷地内で、教育センターの図書室の隣に設置されることになった。エンジン・タイヤ等を外してコンクリートの台の上に設置、本棚には日本から送られてきた様々なジャンルの本を搭載した。バスの安定など安全確保の作業や細かい補修が終了次第、州教育省に正式に譲渡され、本の貸出しが開始となる。周辺には事業対象校数校があり、移動図書館車から本を借りた生徒も多いことから、貸出しを楽しみにしていることと思う。バスの本は生徒や教師のみならず地域住民にも利用され、公共図書館の役割を果たすことを期待している。進展はまた次号でご報告したい。



2013年8月～2016年1月の期間に実施した JICA 草の根技術協力パートナー型事業「学校を拠点とした有機農業促進のモデル地域作り」では、地域の学校40校(小学校、中学校、高校)を対象に学校菜園を作り、生徒と教師に有機農業の指導をしてきました。

その後2年が経ちましたが、学校がどのように菜園活動を継続し活用しているのか、また、地域への有機栽培の普及に、学校がどのような役割を果たし続けているのかを確認するために、一斉にアンケート調査を行いました。

今回のアンケートから分かったことを一部紹介いたします。

回答があった学校数: 38校(40校中)

- ・種は学校菜園から採種している 7校
- ・収穫物を学校給食に利用している 16校
- ・収穫物を孤児・貧困家庭の生徒に配給 17校
- ・収穫物は教師や地元住民に売り、その収益で種や菜園活動に必要なものを購入している 12校
- ・学校菜園を授業に活用している 33校
- ・教師は菜園技術だけでなく有機農業のコンセプトも教えている 37校
- ・菜園委員会生徒は、後輩や委員会メンバーでない生徒に技術指導をしている 33校
- ・菜園委員会生徒たちのほとんどが、家庭菜園も行っている 35校
- ・菜園委員会は活動記録を付けている 33校
- ・学校側は、菜園委員会以外の生徒たちにも家庭菜園を始めることを奨励している 37校

活動を続ける上での問題として多く挙げられていたことは、水不足、近所の家畜や野生動物の侵入でしたが、採種ができていないこと、思うように時間がとれないことを懸念する声もありました。菜園は、理科や生活科などの日常の授業に積極的に活用されているようで、その質問項目の箇所には、ぎっしり具体的に書かれた回答が多かったのが印象的でした。

また、菜園委員会教師たちは、技術指導だけでなく、栄養や健康などの有機農業や野菜のコンセプトをしっかりと伝えている様で、その箇所も情熱的に書かれた回答が多かったです。特に有機野菜がもたらす栄養改善や健康についての記述が目立ち、食生活改善の必要性を痛感していることが分かりました。また、仕事を得る機会の少ない地域において、生徒たちが卒業後に地域でなんとか食べて暮らしていくぎりぎりの手段として、菜園技術習得を勧めている学校もあり、アンケート回答から改めて対象地域の厳しい環境が見えてきました。

その他、委員会生徒以外でも学校で習った菜園技術を家庭菜園に活かして家族に技術指導をする生徒たちが増えていることや、地元自治体から種を配布されている学校もあり、事業終了から2年経て、地域全体で菜園活動が普及している様子が、アンケートから読み取れました。

一方で、採種を続けていない学校が多かったことが大変気になりました。今後は、現行事業の農業塾から学校側に働き



コロコロ地域シャペンバ小学校の畑づくり

かけて、再度採種指導を徹底する機会を作っていきたいと思います。また、生徒たちは家庭菜園で採った種を学校

に寄附するなど、家庭菜園から学校菜園への還元の可能性も今後探れないだろうかと考えています。

## JICA 主催「2017 年度 草の根技術協力事業 よりよい実施のための情報交換会」での事例発表

11月17日、JICA 東京国際センターにて、草の根技術協力事業の実施中団体および採択団体を対象とした「よりよい実施のための情報交換会」がありました。TAAA は実施中の団体として「継続性を見据えた地域住民の巻き込み」というタイトルで事業紹介をさせていただきました。実施後、参加された団体様から、

・継続性について具体的に参考に出来そうな点がありよかった。・相手のキャパシティに合わせていくことの重要性を再確認した。・住民のオーナーシップ確立に向けて工夫している点、意識されている点を知ることが出来た、など多くの感想をいただきました。

TAAA にとっても今回の発表は、今までの事業を客観的に振り返ることのできる貴重な機会となりました。

---

## 本の種分けに参加して

2018.1.15

加賀 知子

TAAA 図書事業担当理事の大友深雪さんが私の高校時代の恩師であるご縁で、学校図書支援活動プロジェクトの図書ボランティアに、これまで5回ほど参加させて頂きました。

初めて作業場に入った時にまず目に飛び込んできたのは、寄付された本のダンボールが山のようにになっている一角です。多くの方々の善意によってこの活動が支えられていることを実感できました。

1月15日の作業では、主に高校生向けの科学や歴史・文化の本を梱包しました。梱包作業は、様々なサイズの本を上手く収まるように詰め、引っ越し作業の要領に似ていますが、ここでは現地で作業がしやすくなるように同じシリーズの本はなるべく同じ箱に詰める等の心遣いを大友さんに教えて頂きながら作業を進めていきました。

本を詰め終わると、どのようにこの箱が開けられるのかなと現地での様子を思い浮かべながら箱に封をします。(限られた時間の中での作業なので、その余裕がない時もあります…)

このボランティアに参加させて頂いたことを機に、今まで遠く感じていた南アフリカについてのニュースが新聞等で目に留まるようになりました。

そして、私自身の生活について振り返るきっかけにもなりました。子どもの頃から身近に本があり、図書館や書店に出掛けて本を探す時間は、大人になった今でもわくわくする楽しい時間です。そして、つらい時や悩んでいる時には本の中の言葉に救われ、その本は私の宝物になっています。日本で生活をしていて当然のように思っていた事に改めて感謝をし、南アフリカの子供達も本との素敵な出逢いがあるよう、心から願っています。その為にも微力ではありますが、これからもボランティアに協力させて頂きたいと思っています。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さった大友さん、事務局長の野田さん、どうもありがとうございました。

# 中村 哲医師講演会の報告

～命の水と緑の大地を拓いて34年～

## 戦乱と旱魃のアフガニスタンから「平和」を考える

上林 潤子

8月25日（金）、TAAAが賛同団体として名を連ねていた「戦乱と干ばつのアフガニスタンから『平和』を考える」という講演会で、ペシャワール会\*の中村哲さんのお話を聞きました。中村哲さんといえば「援助」に関心のある人達の間ではとても有名な方なのでしょうが、私が知っていることといえば、医師でありながらアフガニスタンでたくさんの井戸を掘った人、といった程度のことでした。その中村さんの講演のタイトルは「アフガンに命の水を」というもので、今までそして現在、さらにこれからの20年の活動について、終始穏やかな語り口でお話しされました。以下簡単に概要をまとめてみました。

中村さんは1984年ハンセン病治療のためパキスタン北西部ペシャワールに赴任した。ハンセン病が多い地域はあらゆる感染症多発地域でもあり、また同時に最貧困地域でもあった。以来、アフガニスタン東部も含む地域で医療活動を続ける。2000年にアフガニスタンを大干ばつが襲い、「飢えと渇きは薬では治せない」という状況の出現に、飲料用井戸の掘削を始める（2008年までに1600本を掘削）。2001年のNY同時多発テロ後にはアフガン空爆が開始された。

### 用水路こそ人々の命をつなぐ

厳冬の首都カブールは避難民であふれかえったにも関わらず、「国際社会」からの支援は届かず、ペシャワール会とともに命の危険を顧みず動いた現地の人々の手によって、餓死線上にあった人々に小麦粉と油が届けられる。アフガニスタンは、ヒンズークシ山脈が国土のほとんどを占め、山間部の狭い地域や小さな平野での農業を中心に人々は

暮らしを立ててきた。雪解けの水が豊かな実りをもたらし、人々は命をつないできたのだ。つまり農業用水が確保できなければ人々は生きていくことができない。相次ぐ戦乱と干ばつで難民化した人々の帰還のために、ペシャワール会と現地NGOのPMS（ピースジャパン・メディカル・サービス）は、2003年アフガニスタン東部で灌漑用水路の建設・補修に着手した（「緑の大地計画」）。以来12年をかけて建設した全長27kmの用水路は、3,000haを超える田畑を復旧させ、約15万人の生存を確保した。工事には1日約500人の現地の人々が従事したので、延べ100万人以上の雇用を創出。総工費は約15億円で、すべてペシャワール会員の会費と支援者の寄付でまかなわれた。その後も続く既存用水路の改修や取水口の新設等により、16,000haの灌漑が可能となり、60万人以上の人々が生きていける環境が整いつつある。

用水路事業は日本の伝統工法を参考にした（中村さんの出身地である福岡の治水技術を活用）。用水路は絶えず維持・保全が必要であり、現代的なコンクリート工法では、その修復が現地の人々にとって技術的・財政的に困難である。伝統的に石積みの技術を持つアフガン人にとって、石を使った日本の用水路の保全なら難しいことではない。また、気候変動の影響により洪水と渇水が繰り返される中、年々難しくなっていた取水も、斜め堰などの日本の伝統的な治水技術が力を発揮し、改善されている。

### 武器は安全保障にならない！

草木一本見当たらない砂漠化した土地が、用水路により豊かな緑地に変貌した写真を見せられた時には、会場から思わず大きな感嘆の声が上がりました。植物、動物が戻り、人々の暮らしが戻っ



う  
こ  
と  
を  
身  
を  
も  
っ  
て

感じられたそうです。

てきたのです。アヘンやヘロインの原料であるケシを作って売る、武装勢力や政府の傭兵になる、あるいはまた難民化するしかなかった人々の生活が変わったのです。農村が力を取り戻し、生活が安定し、治安の回復にもつながったといいます。これこそ武器に頼らない平和構築のモデルだと言われるゆえんだそうです。

こうしたことを中村さんは、自慢も謙遜もなく淡々と話されました。医者なのに、土木を実地で学び自ら重機まで繰る、大変でなかったはずなのに、苦しかったことやご自身のことはほとんど語りませんでした。日本に帰りたと思ったこともあったそうですが、現地の人々、日本から支援してくれる人々を裏切ることはできないという気持ちでやってきたこと、用水路の完成にはこれからも長い時間がかかること、自分がいつまで活動できるかわからないことを考え、現地で後継者（技術者）を育てる訓練所を作ったこと、活動を続けるためには、相手が政府機関であろうと国際機関であろうと支援を求めていくこと、この事業をモデルとして、最終的にはアフガニスタンの人々自らが決めた復興への取り組みが進められるべきであることなども語られました。危険な目に遭ったことはなかったのかという質問には、誰とでも話し、どんな人とも仲良くし、敵を作らず、を心掛けてやっていたら危ない目に遭うこともなく、自分は人々に守られているのだと思えたこと、安全は武器によって保障されるものではないとい

### 何があっても続けていける体制を

中村さんはこれから先の20年のこと、自分が活動できなくなってからのことを常に考えていると言います。何があっても支援を続けていける体制、財源を確保するために、やるべきことを今やるという姿勢には、彼の強い覚悟を感じました。また、何かこれ、という信条があって活動を続けてきたのではないという言葉も、現地でアフガニスタンの人々と共に生きてきた人の言葉として、とても印象的でした。

一人の卓越した個人が運動を始める。普通の人に同じことはできないけれど、その運動を日々の暮らしの中で支えることはできるはず。実際に支えてきた人がたくさんいるということ（このところTAAAの活動をまったくおろそかにしている私が言うのは、とても気が引けることではありますが…）。なんだか背中をはたかれたような気分で会場を後にしました。なお、この講演会には1,400人以上の聴衆が集まり、入場料は全て中村さんの活動に寄付されるとのことでした。

\*ペシャワール会：福岡市で1983年に中村哲のパキスタンでの医療活動を支援する目的で作られたNGO。現在はアフガニスタンでの医療活動、灌漑水利事業等を通して総合的に農村復興事業を支援。

## 南アフリカのスタッフ

# ～モンドリ・チリザさんからのおたより～

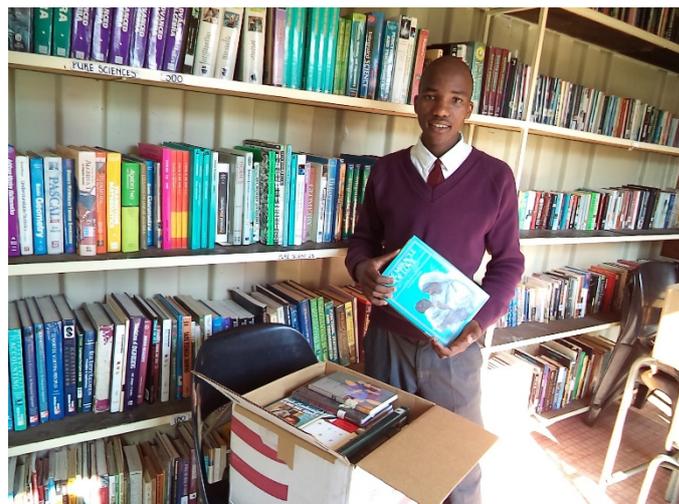
私は TAAA 南ア事務所スタッフのモンドリ・チリザです。プロジェクトではいろいろな学校で活動するのが楽しいです。それぞれの学校で違いがありますが、私自身は小学生への指導がとてもやりがいがあります。

算数セットを使った授業は順調に進みましたが、時間的にも物資的にももっと必要だと感じました。小学生が算数を学ぶ時、数に触れ、数を感じることができるような実質的な授業が必要です。算数セットはまさにそのための道具であり、より多くの学校に配布して使ってもらいたいです。算数セット授業対象校の教師は使い方を習得し、プロジェクト終了後も継続して利用できると思います。ただ、どの学校からもプロジェクトを継続して欲しいと言われました。

図書活動では、対象校の図書室の整備に力を入れました。担任を持っている司書教師もいるため忙しく、教師が図書室に常駐できないことから、図書委員会生徒への働き掛けを強化し、生徒が主体となって図書活動を進めるよう指導しました。学校によって差はありますが、委員会生徒がしっかりと図書活動を行っている学校では図書室が十分に機能するようになりました。

司書教師や図書委員会メンバー生徒を中心に、スペリングコンテストなど校内での様々な活動も行われています。学校から図書室に必要な本や物品のリクエストもあり、配布も行いました。プロジェクト終了後、自主的に活動を行える力をつけた学校もありますが、やはりもう少しサポートやモニタリングを必要としている学校もあります。特に司書教師の急な異動の場合などは、新しく任命された司書教師への研修・補修が必要です。

シャバ小3年生に算数セットを利用した授業を行う



校内でのイベントやコンテストの際に私たちが出席し、優秀生徒への本の授与などを行うことは図書活動への興味とやる気につながるようなので、そのような形でのサポートが続けられればと思います。また IT トレーニングに関しても、学校図書室の活動の一部として継続して行かれるよう、モニタリングをして行きたいです。

学校ではすべての生徒が勉強を得意としているわけではないので、図書室が様々な活動の中心となり、生徒全員が何かに関わる機会を作られればと思います。サッカーなどのスポーツも大切です。特に小学生は、自分の得意分野を見つける時期であるし、私自身も一緒に活動が行いやすいです。

これからも生徒の読み書き能力と理解力の向上を目指して図書活動を続けて行きたいと思っていますので、ご支援、ご協力お願いします。

(訳: 平林 薫)

TAAA はシノクボンガ中学校より図書活動貢献賞を受賞



## 主な活動（2017年7月16日～2018年2月15日）

### 〈日本国内〉

7月～2月 広報など 丸岡晶  
 7月～2月 本などの受け取りと作業場への搬入 北爪健一  
 7月下旬～8月中旬 住所名簿・ラベル変更 西村裕子  
 7/20 JICA 東京国際センター 会議 久我祐子  
 7/23 梱包作業 高野千恵美 野田 西村 三井住友フィナンシャルグループより3人 浦和学院高校より 古屋佳子 石川真奈 星野沙月 矢嶋愛唯 山崎真未 木元真歩 小平優花  
 8月初旬 会報70号編集 野田千香子 校正 西村  
 8/3～8/20 現地視察訪問 久我 大友深雪  
 8/20 梱包作業 丸岡 野田 西村 三井住友フィナンシャルグループより 9人  
 9/17 梱包作業 大友 浅見 野田  
 9/23 外務省N連事業 中間報告書 提出 久我  
 10/2 本12115冊他 出荷 大友 野田  
 10/13 第2 四半期報告書一式および第3 四半期概算払いを確認・作成し、JICA 東京に提出 久我  
 10/15 梱包作業 西村 大友 野田  
 11/6 JICA 東京国際センター JICA 担当者とのミーティング  
 11/1 臨時理事会 出席 久我  
 11/17 JICA 東京国際センター JICA 草の根技術協力「よりよい実施のための情報交換会」での事例発表 久我  
 11/22 クリスチャンアカデミーへ本引き取り 浅見  
 12/17 TAAA 忘年会、報告会 作業 平林 久我 野田  
 12/18 外務省N連事業に関するミーティング 平林薫 大友 久我  
 12/22 理事と平林との話し合い  
 12/27 コロンビアインターナショナルスクールへ本引き取り 浅見  
 1/5 JICA 担当者とのミーティング 平林 久我  
 1/5 第3 四半期報告書一式および第4 四半期概算払いを確認・作成し、JICA 東京に提出 久我  
 1月 JICA 草の根先行事業の学校菜園アンケートまとめ、分析 久我  
 1/15 本の種分け 大友 加賀知子 野田  
 1/19 段ボール購入、搬入 浅見  
 1/21 梱包作業 浅見 西村 野田

### 〈南アフリカ〉

7月27日 南アに戻る 平林薫  
 7/31～8/4 N 連図書事業学校巡回訪問、読書推進イベント、IT・算数セット指導、JICA 農業 塾でスタッフ会議、有機農業トレーニングコース準備、カウンターパート会議  
 8/7～11 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、JICA 農業塾で第5 回トレーニングコース開催、卒業生グループと会議  
 8/12～20 久我代表、大友さんと共に N 連図書事業および JICA 農業塾活動モニタリング、スタッフ及び州教育省学区マネジャーと会議、地域サッカーチームとイベント  
 8/21～25 日 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾でトレーニングコース、スタッフ会議  
 8/28～91 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾でトレーニングコース、地域住民菜園活動モニタリング、ELITS

に本の引き渡し

9/4～8 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾でトレーニングコースと卒業式、収穫物の販売、スタッフ会議  
 9/11～15 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、司書教師と会議、農業塾で他地域の若者グループを対象とした研修会開催、地域住民グループ畑にフェンス設置  
 9/18～22 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、学校菜園モニタリング、農業塾卒業生活動サポート、カウンターパート会議  
 9/25～29 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾卒業生活動サポート、リチャード・ヘイグ氏と会議、トゥートン教育センターで図書館バス設置に関する会議。  
 10/2～6 農業塾でスタッフ会議、JICA 四半期報告作成、地域住民2グループと会議、図書館バスの清掃。  
 10/9～13 N 連図書事業学校巡回訪問、スタッフ会議、学校菜園および農業塾卒業生活動モニタリング、養鶏プログラムの計画。  
 10/16～20 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾で養鶏プログラム準備、スタッフ会議、トゥートン教育センターで図書館バス設置に関する覚書に署名。  
 10/23～27 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、司書教師と会議、KWE 星氏と会議、農業塾で養鶏プログラム準備、他地域 CWP メンバーへの有機農業研修。  
 10/30～11/3 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾でタツ会議、育苗・苗の販売、地域住民グループと会議。  
 11/6～10 N 連図書事業学校巡回訪問、IT・算数セット指導、農業塾で養鶏トレーニングコース開催(3 日間)、図書館バスの登録未済  
 11/13～17 N 連図書事業学校巡回訪問、IT 指導、算数テスト実施、農業塾で第2 回養鶏トレーニングコース開催、山間部保育園菜園活動モニタリング  
 11/20～24 N 連図書事業学校巡回訪問、IT 指導、算数テスト実施、JICA プレトリア事務所の小峯さんが農業塾および卒業生活動視察、他地域若者グループへの有機農業研修会開催  
 11/27～12/1 N 連図書事業学校巡回訪問、エシバニニ小卒業式出席、農業塾でスタッフ・卒業生グループと会議、本の搬入作業  
 12/4～8 農業塾でスタッフ会議、カウンターパート会議、図書館バス設置作業  
 12/9～1/11 日本へ一時帰国  
 1/15～19 N 連図書事業学校巡回訪問、スタッフ会議、算数セットの整理、司書教師へのアンケート準備、農業塾でスタッフ会議、図書館バスに本の配備  
 1/22～26 N 連図書事業学校巡回訪問、図書イベント準備、農業塾でスタッフ会議、農業塾物品の購入と配備  
 1/29～2/2 N 連図書事業学校巡回訪問、司書教師へのアンケート、農業塾でスタッフ及び卒業生グループと会議、カウンターパート会議  
 2/5～9 N 連図書事業学校巡回訪問、図書委員会メンバー生徒へのインタビュー、農業塾でスタッフ会議、山間部での有機農業トレーニングの会場決定(2カ所)と準備、農業塾物品の購入と配備  
 2/12～15 N 連図書事業学校巡回訪問、図書委員会メンバー生徒へのインタビュー、図書イベントの準備、エシバニニ小校長と会議、農業塾でカウンターパート会議